

樋口真吉顕彰会・会報誌

発行人
会長 土森正一
文責 寺尾敏夫

樋口真吉亡き後の動き

明治3年6月14日真吉は麻布客舎にて没した！

享年五十六歳で生涯を終えた真吉

●明治維新政府が発足した慶応四年は年初から戊辰戦争が始まり、戦況は余談が許さない状況の中であったが、三月江戸城無血開城、四月討幕軍江戸城入城、徳川家の駿河府中移封、七月江戸を東京と改名、九月明治と年号を改元と着々と新体制が整え

られた。土佐藩の東征軍は会津戦争の終結段階で十一月に高知に凱旋した。榎本武揚率いる旧幕府軍との函館戦争が終結したのは翌年の五月であった。真吉は慰勞の意味があったのか長州と薩摩に挨拶に派遣されたが十一月徳大寺大納言家の公務



員を拝命、単身で上京した。翌明治三年一月戊辰戦争の勲功として従七位を授与された。

●その後真吉は体調を崩し六月十四日東京大名小路の客舎にて没した。麻布の正徳寺に埋葬された。享年五十六歳であった。この時真吉の継嗣鵬次郎はまだ三歳であり。余りに早や過ぎる逝去であった。

●明治三十六年になり真吉の戊辰戦争時の叙勲が低すぎたと見直され従四位が追贈された。それを期に真吉の墓碑は麻布正徳寺から中村の羽生山にある樋口家墓地に改葬された。

●併せて地元では海軍大将男爵島村速雄揮毫による「贈従四位樋口真吉先生記念碑」を建立、為末公園の二の丸に見ることが出来る。

●その直前明治三十四年真吉の一番弟子である桑原戒平が樋口家に残された真吉の日記類を参照して「樋口真吉伝・樋口先生」を編纂、世に問うたのでした。

この文献は平成十八年佐川の県立青山文庫後援会が青山文庫資料集



「樋口先生」最終章

●迅衝隊に幡多から百

名余の青年が参加していた。「樋口先生」の最終章に桑原戒平の文章で樋口真吉の処遇のみならず、訓練のよく生き届いた幡多の部隊

に對しても余りに門閥主義で判断されていて迅衝隊八個小隊中の二個小隊は真吉の部隊であるのに敢えて真吉を小荷駄裁判役に宛てるとは憤慨している。しかし真吉本人は一向に気にするそぶりも見せず、改めて樋口真吉と云う人間の高邁なる人格に恐れ入るとも書いています。そして勤皇事業について真吉は武市と相對して東西の大家であったと書いて真吉を偲んでいる。

且つ、当時、幡郡の兵士は、自ら訓練を受け、自ら最新式の後装銃を購ひ、尚、行軍に要する必要な資金を携へ、純然たる有志兵に属せり、藩の、幡郡人に於ける、重臣、世家の因縁あることならず、特別の保護獎勵ありしにあらず、古來、藩吏の侮蔑、蹂躪中に委棄せられたる郡中に在りて、而して能く緩急の如きものある、豈に、其源を究めずして可ならんや、況んや、其、勤王事業、必ず藩侯を奉じて一藩を以て為さざるべからずとの大主張、終始一貫して本藩に多大の勲勞あるに於てをや。

然るに、藩は之に与らるるに僅に家格相当の職を以てせし過ぎざりき、小荷駄裁判役は、其實力を要するに於て、或は一隊の指揮者たるに顧らざりしなるべし。然ども、其職位は實に兵站部の一小軍吏たるに過ぎざるのみ。数十年教養の下に出でたる其軍隊は、實に、之と何等の因縁なき青年藩士に由りて指揮せらる。当時、階級の制、之をして然らしめしものなるべきも、今日より先生当時の境遇を顧れば、豈に不遇の甚だしきものにあらずや。然れども、先生の功名、高貴に泊如（私欲に薄き事）たる、更に之を以て不遇事となさざるのみならず、常に愉悅の情を以て其職事に尽瘁したるが如き、益々以て其人格の高大なるを見るに足るものあるなり。

之を要するに、先生は勤王事業に於て、武市と相對して東西の兩大家たりしこと。本藩八箇小隊中の二箇小隊は先生の養成に因るものなること、此二小隊は比較的精兵にして、且つ、本藩有志兵の率先者なりしこと、及び、幡郡人に取っては、吾人の精考（考ふる事）すべし限りに於ての、最偉最大なる誘導者たりしことは、吾人、幡郡人の長く記憶して、忘るべからざる所なりとす。

樋口先生終

文武館の系譜

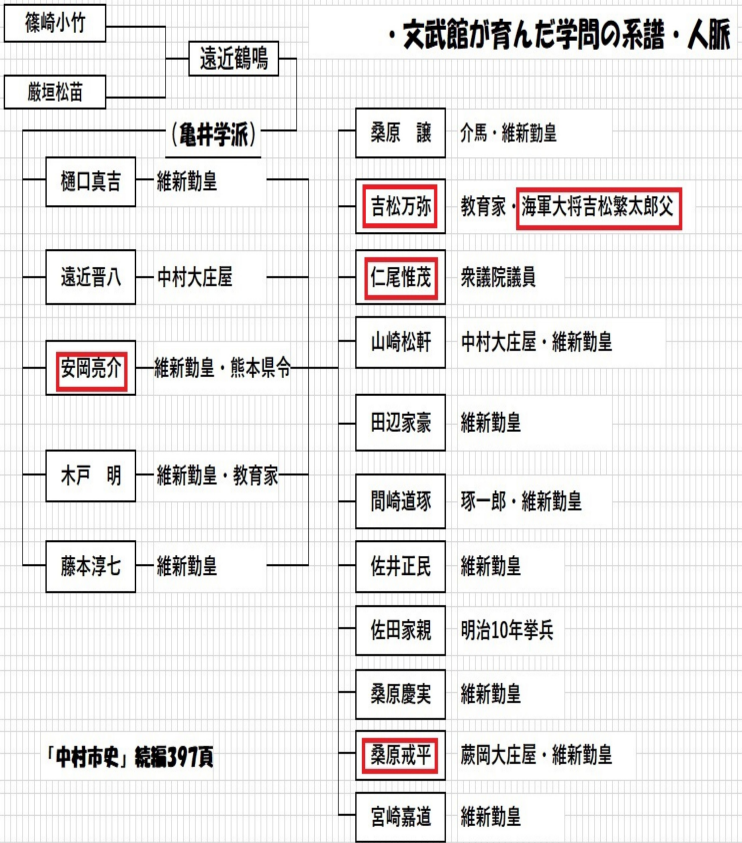
「中村市史」続編の396頁に左記の系譜が掲載されている。いづれも文武館で学んだ人物である。言い換えれば樋口真吉の薫陶を受けて育った人物であり、明治期以降に様々に貢献している人物である。何名かをご紹介したい。

安岡良亮

★文政八年(1825)四月、土佐藩中村の郷士安岡故五郎の長子として誕生。雄邁で文武の才があり、土佐藩士・外池武左衛門に従って日置流の弓術を、西川楠弥太に馬術と刀槍の術とを習い、土方謙吉に砲学を学んだ。文

こえた。文久・元治の頃、樋口真吉に従って幡多勤王党を組織して国事に奔走、慶応三年(1867)京都の小松帯刀邸において、薩摩の西郷隆盛と土佐の乾(板垣)退助の間で交わされた「薩土討幕の密約(薩土密約)」の締結にも参画した。戊辰戦争には迅衝隊半隊長として出征し、拔擢されて扈從格に進む。小監察となった。また、谷干城

文武館が育んだ学問の系譜・人脈



刑にあつた。

★明治になり新政府に仕え、明治二年(1869)弾正少忠、弾正大忠、明治三年(1870)集議員判官、明治四年(1871)民部少丞、八月以降、高崎県大参事、群馬県権参事、群馬県参事、渡会県参事を歴任。明治六年(1873)、白川県権令に就任して熊本(現熊本市)に着任、明治八年(1875)には白川県令、明治九年(1876)熊本県令になる。この時右の十六名の部下を

【表2】安岡良亮が白川(熊本)県の官吏に採用した高知関係者一覧

着任年月日	官職	人名	旧名	族籍	旧藩	年齢
M6.5.30	白川県権令	安岡良亮	亮太郎	高知県士族	元高知藩士	47年2月
M7.10.24	大属	尾崎行正	彦四郎	高知県士族	元高知藩士	37年
M6.10.17	権大属	仁尾惟茂	準平	高知県士族	元高知藩士	23年11月
M6.11.5	権大属	柳川千里	源六郎	高知県士族	元高知藩士	28年4月
M7.4.19	権大属	遠近武則	晋次郎	高知県士族	元高知藩士	27年2月
M8.9.14	七等出仕	桑原戒平	藤次	高知県士族	元高知藩士	
M7.10.17	八等出仕	近藤幸止	百助	三重県平民	元亀山藩士	30年3月
M6.10.17	少属	杉本清晟	達	高知県士族	元高知藩士	22年4月
M7.11.29	十二等出仕	吉松萬彌		高知県士族	元高知藩士	36年
M7.1.31	十三等出仕	山内憲氏		高知県平民	元高知藩士	42年1月
M7.10.10	十三等出仕	三本吉立		高知県士族	元高知藩士	38年6月
M9.11.20	十三等出仕	吉田敏一		高知県士族	元徳島藩士	24年
M6.7.28	十四等出仕	平松宣棟		高知県士族	元高知藩士	27年9月
M6.11.2	十四等出仕	川久保信任		高知県士族	元高知藩士	31年9月
M9.3.30	十四等出仕	松本俊熊		宮城県平民	元仙台藩士	38年6月
M7.4.24	十五等出仕	東野秀彦	日出彦	高知県士族	元高知藩士	20年5月
M9.4.24	五等警部	沖本忠三郎		高知県士族	元高知藩士	28年3月

出典：「熊本県史料」をもとに作成。

桑原戒平

た陽明学者・安岡正篤の曾祖父にあたる。

★桑原家の祖は初代中村藩主山内康豊に従つてきた医師。中村藩改易後は江ノ村に移り庄屋となり周辺に分家。戒平は蕨岡伊才原大庄屋桑原義厚の長男として弘化元年生まれた。戒平は学問を安岡良亮に、剣術を樋口真吉に習った。維新東征では迅衝隊十二藩隊半隊長差引役、会津で負傷。安岡良亮長女芳と結婚した。真吉の一番弟子。★新政府に入り、清国に留学派遣。明治八年、安岡良亮が先に赴任していた白川県(熊本)へ七等出仕。同九年、

連れて着任した。このとき太田黒伴雄の敬神党(神風連)の人々の人心調和に努め、佐賀の乱に際しては熊本士族の動揺を鎮めるなど良政を施したが、明治九年(1876)十月二十四日神風連が挙兵(神風連の乱)、自宅を参事・警部ら四人と対策会議中に神風連・吉村義節らの襲撃にあつて重傷をおつた。このときは裏の畑に隠れて助かったが、三日後に鎮台病院で死去した。大東亜戦争の際、終戦詔勅の起草文を刪修し

暴徒の狙いは世子の擁立にあり。

くまもとけんれいだいりょうしんしよ
37 熊本県令代理上申書(控)

桑原戒平 筆/明治9年(1876)10月26日
紙本墨書、冊子装
熊本県立図書館蔵

神風連の乱直後の状況について、熊本県から太政大臣三条美実に出された上申書です。県令安岡良亮が重傷を負ったため(10月27日に死去)、彼の娘婿であり、七等出仕の桑原戒平(旧高知藩出身)が県令代理として上申しています。注目されるのは、敬神党が蜂起した目的が、「鎮台・県庁を奪い、旧熊本藩知事の世子を擁立し、旧藩士族の支持を取り付けた後、反乱を他県に波及させる」点にあると、事件直後の桑原が見なしていた事実です。そのため、旧藩主細川家は敬神党の挙兵と無関係だったにも関わらず、関係者が県の取り調べを受けることとなりました。

神風連の乱に遭遇。県令良亮は斬られたが難を免れ、県令代理として事件処理に奔走。翌年も西郷蜂起の西南戦争があったが、収束後中村に帰郷。初代桑原平八(同族)に続き、二代目幡多郡長(明治十三年)に就任。★戒平は事業意欲も盛旺。親戚縁者から資金を募って同求社を立ち上げた。旧土佐藩貨幣局の事業の払い下げを受け、大阪港路開設、樟脳の輸出等のほか、板垣退助から権利譲渡を受け、田ノ口銅山採掘にも乗り出した。戒平は明治十八年七月、高知の弥生新聞(帝党派)が読者人気投票で選んだ「土佐十秀」の中の「商家」部門に

おいて二百十四票を獲得して一位となった。他は「慷慨家」板垣退助、「理論家」植木枝盛、「画家」川田小龍など、高知の錚々たる顔ぶれの中で幡多から唯一登場。高知市立自由民権記念館に、その記事が展示されている。

★しかし、事業はそれこそ「武士の商法」で、たちまち行き詰った。戒平は中村にいられなくなり、家督を弟義忠に譲り、東京へ出た。戒平には官時代の人脈があった。上京後は北豊島郡長、八丈島島司、小笠原島司から日本統治後までも台湾新竹支庁長などを歴任。台湾では総督の乃木希典、児玉源太郎に仕えた。

★何よりも大きな功績は明治三十四年発刊した「樋口先生」の編纂であろう。敬愛してやまない樋口真吉の戊辰戦争時の評価が見直される時期に併せて真吉の生の姿を後世に書き残したい思いがそうさせたのであろうか。

★戒平は老いてからキリスト教に入信。大正九年、七六歳で没。

○吉松萬彌

★天保九年(1838) 明治十二年(1879) 申田元瑞の二男。吉松孫次郎の養子。吉松家第10代当主(土佐藩士)。息子は海軍大将吉松茂太郎である。

★経史を遠近恒齋に学び、のち真吉の影響で九州筑前亀井陽洲に学ぶ。帰国後、私塾晩翠堂を開き子孫を指導。幕末期には安岡良亮、樋口真吉を助けて国事に奔走。中村文武館教授となり、後に官界に入り、民政司主簿から司法省出仕判事係として、熊本裁判所勤務、天草裁判所長となる。神風連暴動に際して功勞を賞された。

★「吉松茂太郎」紹介 土佐国(高知県高知市)出身。土佐藩士の吉松萬彌の長男。12歳まで藩校の致道館に学びその後東京で漢学を学ぶ。1874海軍兵学校に入り軍人畑を歩む。卒業後、海軍兵学校通学士官となった。1885.11 浪速分隊士となり、翌年、浪

速回航委員としてイギリスに出張。帰国後、参謀本部第二局課員となる。1888 フランス留学。翌年からフランスにて実地練習のため、フランス軍艦「オセアイン」。次いで「サレル」の乗組員となった。1891 フランスにて造船監督官となり、帰国することなく、英仏両国出張となり、三景艦などの建造に参加した。1893 帰国し、大島分隊長を経て、1894 吉野分隊長となり日清戦争に従軍した。同年末からは西海艦隊参謀として扶桑に乗組んだ。1895 少佐に進級後は、呉鎮守府参謀・海軍望楼監督官、海軍大学校教官・軍令部第一局長を歴任。大佐に昇進後は、常備艦隊参謀長・佐佐保鎮守府参謀長を経て、浪速艦長と高砂艦長、海軍兵学校教頭を務めた。

★日露戦争の時は常磐艦長。1905 敷島艦長となった。少将になつてからは、佐世保と呉鎮守府参謀長、第一艦隊司令官、海軍兵学校長を歴任し、1909 中

將進級後は海軍大学校長、竹敷要港部司令官、第二艦隊司令官長官、1912.12 教育本部長、1914 呉鎮守府司令官となる。1915.9 第一艦隊司令官に就任。同10月から二月に行われた海軍大演習の後、連合艦隊司令官を兼ねることになった。この頃は大演習などに際して連合艦隊が編成され、第一艦隊司令官が連合艦隊司令官を兼ねていた。またそれまでの連合艦隊司令官は薩摩長州の出身者であったが、初めて薩長以外からの出身者(土佐)となった。

吉松の場合は、1915.11.1から12.13、1916.9.1から10.14、1917.10.1から10.22 の3回にわたって連合艦隊司令官を務めている。この間に、1916年末に海軍大将に進級した。3回目の連合艦隊司令官後は軍事参議官となり、1919.11月 待命となり、翌年予備役となった。

その後は、1921 海軍有終会会長や土佐協会顧問などを歴任した。

○仁尾惟茂

1929 退役。正三位従二位 勲二等 功三級。享年75歳。海軍葬が執り行われた。輝かしい軍歴の吉松茂太郎は、今歴代の海軍連合艦隊司令官8名らと共に多摩霊園の吉松家の墓に眠っている。

★嘉永5年(1832年) 昭和7年(1932年) 4月11日

★土佐藩士仁尾宗直の子として現高知県四万十市双海に生まれた。安岡良亮の門に学んだ後、戊辰戦争に従軍、その後1872年(明治5年)より安岡良亮に従い熊本県に出仕したが、1876年(明治9年)に神風連の乱に遭い、負傷した。後に福岡県に転じ、福岡収税長に進み、1887年(明治20年)からは大蔵省参事官を兼ねた。

★日清戦争がおきると、李氏朝鮮に度支部顧問として派遣され、財政改革にあたった。帰国後は専売事業を手掛け、専売局長、煙草

○山崎慎六郎

専売局長、煙草専売局長官、専売局長官を歴任した。

1907年(明治40年)に退官し、同年12月10日、貴族院議員に勅選され、死去するまで在任した。1916年(大正5年)3月27日、錦鶏間祇候を仰せ付けられる。仁尾惟茂は真吉人脈の中で貴族院議員にまで出世した出世頭である。

★天保二年(1831) 2月中村大庄屋山崎伝三郎の次男に生まれた。遠近鶴鳴に文学を、樋口真吉から文武を修学し、剣は大石神陰流免許皆伝である。嘉永五年文武館講師養成のメンバーに選ばれ、諸国を歴訪して剣と砲術を学んだ。帰国後には同志と申し合わせて大砲老挺を献納。翌七年には異国船渡来の節、郷土差配役を拝命した。

★安政三年臨時御用で江戸へ出張を命じられ、翌四年九月お暇後、更に砲学・砲術研究の修行を願ひ出て、西洋砲

術を江川太郎左衛門・下曾根重三郎・蛭川藤五郎・荏原土佐之介に、洋学を大木忠益(塾頭が大鳥圭介)ら当時の新進気鋭の師について修行中、藩より砲術・洋薬の修行を命じられて江戸に留まること五年、曼延元年(1860)西洋式砲術の調練を馬場にて幕府高官の前で指揮官を拝命した慎六郎は見事にその任を全うし扇子五本を拝領する破格の榮譽を得た。

★文久元年帰国する際に金沢の大砲鍛冶高橋清左衛門を伴って帰り自宅(現幡多奉行所後の広域)に工場を設け郡内の鍛冶中村元次、田ノ川江之丞兄弟他数名らを集め鉄砲製造の業を修行させた。また翌年には藩主上洛に随行し、京都三十三間堂に於いて開催の野砲演習の臨時指揮官を勤めて見事に責任を全うした。この時樋口真吉も藩主豊範に随行して京に居たのである。真吉も我弟子慎六郎の成長を心から喜んだことであろう。慎六郎は翌三年帰国後は土佐藩の砲

術を江川太郎左衛門・下曾根重三郎・蛭川藤五郎・荏原土佐之介に、洋学を大木忠益(塾頭が大鳥圭介)ら当時の新進気鋭の師について修行中、藩より砲術・洋薬の修行を命じられて江戸に留まること五年、曼延元年(1860)西洋式砲術の調練を馬場にて幕府高官の前で指揮官を拝命した慎六郎は見事にその任を全うし扇子五本を拝領する破格の榮譽を得た。

★文久元年帰国する際に金沢の大砲鍛冶高橋清左衛門を伴って帰り自宅(現幡多奉行所後の広域)に工場を設け郡内の鍛冶中村元次、田ノ川江之丞兄弟他数名らを集め鉄砲製造の業を修行させた。また翌年には藩主上洛に随行し、京都三十三間堂に於いて開催の野砲演習の臨時指揮官を勤めて見事に責任を全うした。この時樋口真吉も藩主豊範に随行して京に居たのである。真吉も我弟子慎六郎の成長を心から喜んだことであろう。慎六郎は翌三年帰国後は土佐藩の砲

術指導役になり、文武館および自宅にて砲学・洋学を教授した。迅衝隊にも砲車指揮官として参加活躍している。

★文武館は名前を高知の文武館に譲った後は敬止館となり、明治になつて行余館となつたが、その建物に四名の名前と経歴が掲示されていた。(左記)

★山崎慎六郎は安政四年から五年間江戸で砲術の修行に励んでいた際に、江川太郎左衛門英龍から学んだと中村市史にあつた。確かに英龍は長崎に赴いて高

島秋帆から近代砲術を学ぶと共に幕府に高島流砲術を取り入れ、江戸で演習を行うよう働きかけた。これが実現し、英龍は以後は高島流砲術をさらに改良した西洋砲術の普及に努め、「江川塾」を江戸に開き、全国の藩士にこれを教育した。佐久間象山、大鳥圭介、橋本左内、桂小五郎、黒田清隆、大山巖、伊東祐亨などが彼の下で学んでいる。だが安政二年(1855)に病没しているの、山崎慎六郎が学んだのは長男か

もしれない。しかし、山崎慎六郎の砲術修行は真吉を補佐して土佐藩の海防への貢献は極めて大であつた。明治十一年病没した。享年四十八歳。墓所は四万十市佐岡にある。

前記の著行余館記事末尾に「但本校に関する二三有名之士は、則其略伝を掲げて之を左に列記す。」とあつて次の四名の略歴があげられている。ここにある

樋口真吉 中村、幡多勤王党の総帥の中心人物

安岡良亮 中村、幡多の郷土頭的存在。熊本県令。

熊本神風連の乱で殉職

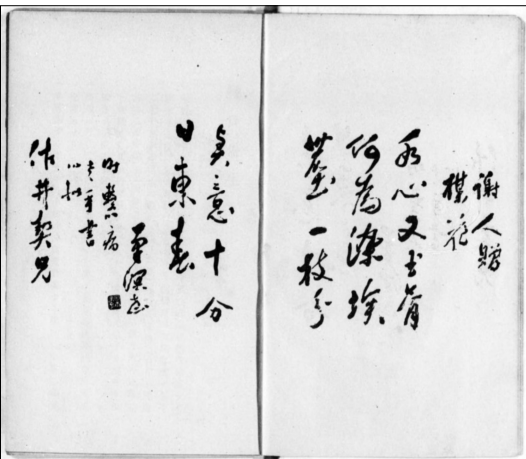
山崎慎六郎 中村、中村大庄屋家、別戸立郷士、幡

多砲術界の中心的指導者

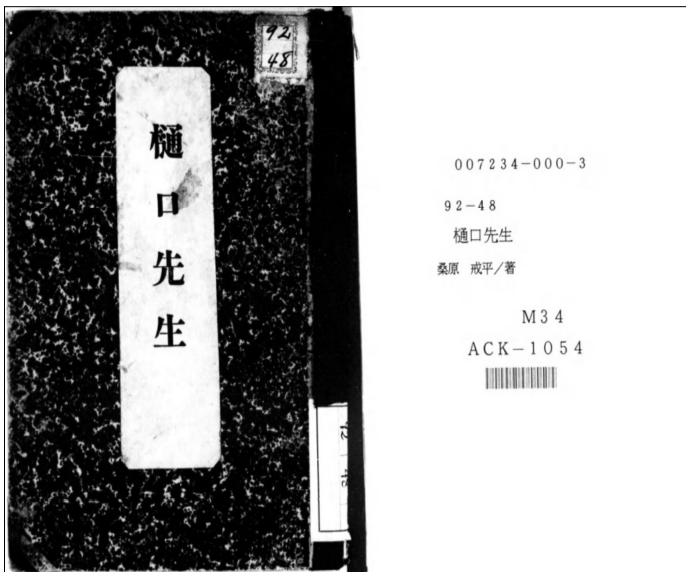
桑原讓 蕨岡、幡多勤王党の重鎮の一人。維新後官

界入をして邏卒隊総長迄栄進。

真吉の文書新発見か？

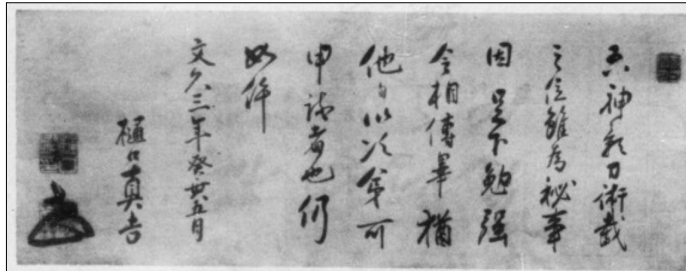


ももしれない。しかし、山崎慎六郎の砲術修行は真吉を補佐して土佐藩の海防への貢献は極めて大であつた。明治十一年病没した。享年四十八歳。墓所は四万十市佐岡にある。



電子版「樋口先生」

●桑原戒平著「樋口先生」をネットで検索してみたら国会図書館のデジタル文庫版「樋口先生」に出会つた。その冒頭に樋口真吉の二種類の書を発見した。悲しいかな読めないのが、渋谷先生に解説をお願いしているが、あるいは新発見かもしれないと、期待しています。署名入りの方は文久三年五月とあり、前年の藩主側近に登用され、



江戸から帰省した頃の成長した真吉の署名入りの文書だとしたら、或いは真吉の心境などが書かれているかもしれない。もう一つの方は佐井虎次郎の名前が見える。簡単なメモのようにも見えるが桑原戒平が渾身の想いで纏めた樋口真吉伝に敢えて掲載している文書なので、何か意味があるのではないだろうか。それと考へてしまふ。それにしても国会図書館の電子版「樋口先生」は正に明治三四年発刊の初版を写真で読むことが出来る訳で、特別の

編集後記

●六月十四日樋口真吉の墓前祭を3名でささやかに行ってきました。例年雨期なので天候が気になったが何とか清掃作業とお参りをおこなつた。十月には龍馬ワールドがあり、案内掲示板があつた方が良かったのだが、実行委員会に問題提起する予定。●坂本龍馬会の中に江戸の千葉道場の流れく

感慨がこみあがつてくるから不思議である。東京の千代田区の国会図書館に行けばこの現物と体面できるかもしれない。本文は佐川青山文庫版と同じであるうけれどまさか真吉の自筆の文書が写真で掲載されていようとは思わなかつたので新発見の資料であつて欲しい。しかし渋谷先生をはじめ樋口真吉の研究者の皆さんには既にご承知の資料かもしれないので、あまりぬか喜びしない方がよいかもしれない。渋谷先生の解説結果に期待しましょう。

む千葉まい氏が「龍馬108人女人会」を主催されており、四万十大会に14名で参加する予定だと表示しておられた。彼女には「幕末足軽物語」を提供して以来、Facebookで交流があるので、福井龍馬会も含めるとエクスカーション真吉コースの募集も目途が立つたと皮算用している。